

フィールドワークの面白さに惹かれて、「蚊」を追いかけたいです！



Role Model 01

米島万有子

大学院人文社会科学部准教授

文学部 → 大学院（博士前期課程） → 大学院（博士後期課程） → 大学（研究員） → 大学教員

Profile よねじま・まゆこ 2003年愛知県立千種高等学校卒業。2008年立命館大学文学部（人文地理学専攻）卒業後、同大学大学院文学研究科（博士前期課程）、その後博士後期課程に進学。2014年博士（文学）取得。同年立命館大学にて専門研究員（PD）として勤務。2016年に熊本大学に着任。

水害にあったことが
地理学を学ぶきっかけに

今振り返ると、高校時代の恩師に「あなたは大学向きだ」という言葉をもらったことが、研究者になる最初のきっかけだったと思います。課題を通して、自ら問いを設定し、現地調査をしてまとめる作業の方が、詰込み型の学習よりも向いていることにより自分自身で気づいた機会でした。より具体的に、研究者になることを決めたのは、卒業論文の調査を始めた3年生の時です。指導教員や先輩たちが楽しそうに研究する姿を常日頃身近で見ていることも大きいですが、国立感染症研究所の先生からの「大阪城へ一緒に蚊を取りに行かない？」という声かけが蚊の研究へ導かれていったきっかけとなりました。

自身が水害にあった経験によって、地域の特性や歴史に興味を持ち、地理学を学びたいと決めました。そこで、地理学を幅広く学べる事と、AO入試のフィールドワーク演習方式の入試形態がある立命館大学への進学を決定。フィールドワークや研究の面白さ、研究上で出会った恩師たちの繋がりは私にとって何ものにも代え難いことに気づき、大学院進学を選択しました。研究

内容から医学系や生物系の分野に進学も考えましたが、既往研究とは異なる地理学の視点から行うことも重要と考え、指導教員や研究施設など研究環境が十二分に整っていたことから、立命館大学大学院文学研究科に進学しました。

「蚊」が、ヒトや社会に
どのように関係しているのか

主に蚊が媒介する疾病に関する研究に取り組んでいます。特に、①蚊は「どこ」で生息しているのか。②人は「どこ」で蚊に刺されているのか。③人は「どのように」蚊や疾病を対処するのか、という3つの視点から研究を行っています。①については、トラップを様々な場所にかけて蚊を収集し、トラップを設置した場所の周囲にはどのような土地利用がどの程度の面積を占めているのかを調査します。そして、調査結果を統計分析し、どのような環境でどの種類の蚊がどれほど発生しやすいのかを明らかにすることによって、実際に蚊の捕集調査をしていない地域の蚊の発生数を推定します。生息分布の推定地図は、媒介蚊が多い場所すなわち病原体が侵入した場合の疾病の流行する可能性を示すリスク

マップといえます。研究成果や作成したリスクマップは、どこを重点的に対策するべきかを考える基礎資料として活用できるようにしていきたいと研究に励んでいます。

心が折れそうになることも多々、
でもそれを上回るなにかがある

研究には、興味関心の変化に対応しながら好きなことに取り組めることと、常に新しい発見ができる楽しさがあります。調査先や大学でも様々な経験を積むことができ、様々な人と接する機会が得られることは刺激的であり、成長のきっかけとなっています。

反面、常に頭から研究や仕事が離れず、毎日追われ



ブルーシートのくぼみは蚊の発生源となりやすい場所なので注意

ている感があるため、現状は仕事がほぼ100%です。着任して3年目に入ったので、今後は仕事・研究の比重や質を変化させていきたいと思うようになりました。

これまで「日本で蚊や蚊が媒介する病気の研究をしても意味がない」などの批判的な意見を受けることも少なくありませんでした。しかし、諦めずに続けていたところ、デング熱の国内流行によって転機が訪れ、研究への風当たりは変化し、縁が繋がって今の職に就いています。芯を強くもって、自分のやりたいと思うことを貫いていけば、道が開く時が訪れる。そのことを今の学生にメッセージとして伝えたいです。

宝ものは？

家族や恩師、研究仲間、友人。

これまで非常に人に恵まれることが多く、周囲の方々が助けてくださったからこそ、いまの私があります。

何事にもチャレンジし続けることが目標です！